様式第２号

| 視察研修先 | 独立行政法人国立病院機構<br>四国こどもとおとなの医療センター | 氏名 | 太田　陽子 |
|---|---|---|---|
| 視察研修項目 | ホスピタルアートの取り組みについて | | |

感想・所見など

四国こどもとおとなの医療センターは、二つの国立病院を統合して 2013 年に新設された病院で、前進の香川小児病院時代、2009 年児童思春期病棟に描いた「楠の壁画」で、ホスピタルアートを取り入れはじめ、今年で 10 年になったという事であった。

アートに何ができるか、「痛み」を「希望」に、2013 年新設された病院の外壁には、進化した楠が描かれていた。アートの中に、病院があり、アートと一緒に病院を創ってきた。

「対話」を通し、意見を出し合い、みんなで病院を創ってきた。

「痛み」＝「問題」のある所にアート、話し合いの中でアイディアを出していく。問題の解決にアートで改善していく。

リハビリエリアの通路が殺風景という事で、本人も障害がある画家がデザインした絵を、医療チームも参加し、光のようにいろいろな色の要素になり、一つのものを創造していく。その中でお互いの違いを感じている。

アートでいい空間を創る、病院の個性であり、多元的な功をもたらしている。

人と人のエネルギーの循環をもたらしている。

経営的は多少の影響はあると思われる。

屋上の庭園など、管理が大変だったが、ボランティアの協力があり、管理できている。様々な人が関わることができるよう管理をデザインし、いろいろな人に声をかけると、人が集まってきた。

障がい者の施設や中学生など。長期的な視点で取り組み問題を解決してきた。

全員参加型の病院づくり、自分もかかわり、誇りが持てるようになる。

アートボランティアは、180 名を数え、全国にいる。日常的に予約制にして、ものづくりなどしてもらっている。音楽のボランティアも受け入れている。

自然治癒力が最大限に生かされる環境づくりと考え、自然から学ぶ、多様性、人として尊重しあうなど大切にしている。

看護師などから、霊安室までの廊下の壁が無機質で寂しいなど意見が寄せられたので、多くの職種が話し合いを行い、壁画を作成したなど、医師や看護師など、すべての部門の職員が、壁画の作成に参加した。家族を亡くした方が、職員の心を感じてくれたという事だった。

玄関の前の芝生に、小人の家を設置し、芝生を踏まれないための対策との事だった。看板を設置してあったが、小人を踏まないように小人は見える人と見えない人がいるなど、無機質でなく、心の通った看板で読んでも楽しいものだった。この対策も新人職員が考え、手作りという事だった。

すべての病院のスタッフが参加し、よりよい病院を、患者に寄り添った医療を届けていきたいという「心」が伝わってくるような取り組みがなされていた。

忙しさに追われている医療従事者にとっても癒しの空間になり、モチベーションもあがり、より良い医療が提供できるのではないかを感じた。

一つの事を貫く力、それを進化させていくために、すべてをデザインしていることに感動した。

どの職場でも必要な「対話」話し合う事、人を大事にすることとはなにか、みんなで同じ方向を向いて、良くしていきたいと思うこと「チーム」という概念など、改めて考える機会となった。病院のあり方など、考える機会になった。

様式第２号

| 視察研修先 | 香川県高松市議会 | 氏名 | 太田　陽子 |
|---|---|---|---|
| 視察研修項目 | 市立病院の再編・ネットワーク化について | | |

感想・所見など

高松市は、6町と合併し、３つの市立病院のあり方について検討してきた。

市民病院と香川病院を一つにして、塩江病院を生かすという案にまとまった。

現在のみんなの病院は、以前の市民病院より，北へ８ｋｍ、香川病院より、南へ４ｋｍという位置に建設した。

塩江病院は、10ｋｍあるため、在宅支援や訪問医療・看護などの役割を残した。

都心部には、県立病院や民間の病院もあるため、場所を移したことで、中南部の患者が増えている状況である。

アクセスは、車社会のため駐車場を大きく取れて、便利になった。近くには私鉄の電車の駅もあるが、利用客は少ない。バスの路線も乗り入れている状況である。バス路線を増設した。重症の患者が多く、交通機関の利用は少ない。

移転後は、患者数は増加しているが、移転が遅れたこともあり、赤字が多くあり、経営は厳しい状況である。

今年度の医療収入は増加しているが、一人当たりの単価が減っている。コンサルの力を借りて、経営の立て直しをしている。

9月の病床利用率は、85％である。

入院一日当たり、250人、55000円を目標にしているが、現在は52000円、外来は、500人、15000円を目標にしている。今後も回転率をあげなければならないと考えている。

以前からの市立病院の負債が多く、組合の了解をとり、病院局の職員の給与カットを今年度まで行ってきた。医師も含めている。しかし、モチベーションの低下につながらなかった。

県庁所在地のためか、負債も一般会計からの持ち出しも大きかった。

地域包括病棟や緩和ケアなど、より市民に寄り添う医療など、施設を整備していたが、稼働率が伸びないという事だった。利用できる市立病院の実現が大切と感じた。

市民が気軽に掛かることのできる病院として、公費の投入など当然と思えるが、経営を考える管理者や院長、事務方などが苦悩している様子が理解できた。

いろいろなケースを見聞きし、どのように改善していくか、今後も研究していきたい。

様式第２号

| 視察研修先 | 愛媛県四国中央市議会 | 氏名 | 太田　陽子 |
|---|---|---|---|
| 視察研修項目 | 子ども若者発達支援センターについて | | |

感想・所見など

２市１町１村の合併により、いろいろな場所で提供していたサービスなどを、一つの場所にまとめ、総合的に支援できるセンターとして設立した。

親子通園、個別支援、ことばの教室、心理判定、計画相談、放課後デイサービスなどあった。

専門の職員の配置など充実していた。

箱庭療法など専門の心理士がおり、活用しているという事だった。

毎年、職員の配置を充実しているという事だった。ST や PT、OT など、総合的な療育の場があった。

市立という事で、一般会計よりの持ち出しも多いが、職員の専門性など担保でき、早期の療育など可能にしていた。

感覚統合療法なども取り入れ、親子通所を基本にしているとの事で、親子の育ちなども支援していた。

特別支援学校は車で一時間ほどかかるため、今後、分校の開所が予定されている。

放課後デイサービスについては、近隣の学校に通園バスを回して、受け入れている。長期の休みになると、帰省する子どもを優先に受け入れているという事だった。市立のため、調整が必要との事だった。

手帳を持っていなくても、相談は受けられる。

総合相談は、３９歳までの大人でも受けられる。不登校の相談も多くなった。

引きこもりやニートと言われる若者に、体験型のサービスを提供している。調理実習やイベントの装飾など行っている。

地域支援機能の強化のため、多職種連携による事業を実施している。巡回相談や学校教育課の巡回相談などにも参加している。

総合的に子どもの健やかな、発達を支援していた。

独自に５歳児の検診を行っていた。

不登校児支援に関する情報共有と連携を行う子ども支援室連絡会等開催していた。

子どもの発達支援を市が独自の施策を作り、他の幼稚園などと連携を行い、どの子も健やかに発達できるような連携を図っていた。

大人になっても、情報を共有できるようにしているという事だった。

幼児期、学齢期、青年期など、各々のライフステージでの対応が違い、不適応を起こしてしまうなど生きづらさを感じることなく、どのステージも安定することにより、獲得できる力を支援できる環境を作れると思った。子どもの安定と安心は家族にも波及することであり、支援する側の安定にもつながっていくと思われた。

今後、不登校や引きこもりなど、多くの子どもの支援に広がる可能性を感じた。

増える不登校児や引きこもりなど、どの自治体の課題であり、今後もいろいろな取り組みなど研究していきたいと思った。